

RETAILER ACADEMY NEWS

Apr 2022 | Bentley Motors Japan

アースデーを機に考える ベントレーの サステナビリティへの取り組み

毎年4月22日は、地球環境について考える日として提案された記念日「アースデー」です。昨年は「#Project1hour」として、フォルクスワーゲン グループ全体で環境について考える時間を設ける活動を行いました。日本のリテーラーの皆様にも、アカデミーニュース特別号を配信し、同様の活動にご協力いただきました。今年もアースデーを機に、ベントレーのサステナビリティへの取り組みをあらためてご紹介いたします。

工場関連

クルー本社および工場でカーボンニュートラル認証を更新

環境およびエネルギーに関する2つのISO 認証を更新

クルーの物流部門でバイオ燃料導入

クルーで工業用水の新リサイクルシステムを導入

クルー工場にリビングウォール設置

クルーの工場は、2019年にカーボンニュートラル認証を受けましたが、2021年に同認証を更新しました。2019年の認証取得後もCO₂排出削減に取り組み、今後も大型投資によってカーボンニュートラルの動きはさらに加速していきます。認証という点では、環境マネジメントシステムの国際規格ISO14001と、エネルギーマネジメントシステムの国際規格ISO50001の認証も更新しました。ISO14001は、1999年に英国の自動車業界として初めて取得した認証で、環境セクターとして最良かつ最長の事例となっています。ISO50001の認証は2011年に取得。エネルギーモニタリングシステムや太陽光発電パネルの増設などで、エネルギー管理を推進してきました。クルーの物流車両向けにはバイオ燃料を導入し、12カ月でCO₂を233トンも削減。ベントレーは水も無駄にしない方針で、逆浸透現象を利用した工業用水の新リサイクルシステムを導入。システムに引き込んだ水のほぼ全量を再活用しています。工場敷地内の最も人通りの多い場所にはリビングウォールを設置。生物多様性の改善に取り組むとともに、サステナビリティがビジネスの中心にあることを示しています。



地域社会・リテーラー

ザ・マッカランと持続可能な未来に向け異業種コラボ

「Flying Bee」で生物多様性の改善に取り組む

英国のリテーラーがカーボンニュートラル達成

ベントレー モーターズと高級スコッチウイスキー メーカーのザ・マッカランは昨年6月、持続可能な未来へのビジョンを推進するためのパートナーシップを締結しました。このパートナーシップにより、卓越した技術とクラフトマンシップ、創造性、革新性を重んじ、最高品質を求めるうえで一切妥協しないというお互いの伝統を守りながら、地域社会とともに歩む持続可能性に向けたさまざまな知見を共有していきます。地域社会という点では、2019年から始まった生物多様性改善プロジェクトの1つ「Flying Bee」もあります。地元養蜂家の助けも借りて12万匹からスタートしたクルー敷地内での養蜂は、翌年にはミツバチを30万匹に増やしました。瓶詰めにして約200個が収穫でき、従業員に配ったりVIPのお客様にプレゼントしたりしています。

カーボンニュートラルでは大きな進展がありました。英国のリテーラー全24拠点で、2021年にカーボンニュートラルを達成しました。英国のリテーラーが取得したのは、クルー工場が取得したのと同じカーボントラストのPAS 2060認証で、各拠点では植樹を行ったり従業員用の車両をBEVやPHEVに転換したり、さまざまな取り組みが継続的に行われています。日本でも今月上旬に販売店の皆様にカーボンニュートラル達成に向けた取り組みの説明会を行いました。ご理解いただき、カーボンニュートラル達成にご協力ください。





車両

ベントレー初のEVは英国で設計・生産

ファイブ・イン・ファイブ計画を発表

Beyond 100 戦略にヒントを与えたEXP 100 GT

フライングスパー ハイブリッドがアイスランド横断

再生可能エネルギーでパイクスピークに挑戦

マリナーのオプションにツイードのドアパネルを追加



ベントレー モーターズの Beyond 100 戦略では、モデルラインアップの電動化が非常に重要なファクターとなっています。そのうえでベントレー初の完全電気自動車(BEV)を、クルーで開発・生産することを確約し、サステナビリティの実現に向けて今後10年間で25億ポンドの大型投資を行うことが決定しました。これにより、ベントレーの製品ポートフォリオは大きく変わり、クルーの設備などもデジタル化などで大幅な変貌を遂げることになります。また、2025年に初のBEVを発表してから5年間は、毎年BEVのニューモデルを発表していく「ファイブ・イン・ファイブ」計画も明らかになりました。このBeyond 100 戦略を策定するうえで、さまざまなヒントを提供してくれたのは、創業からちょうど100年にあたる2019年7月10日に発表されたコンセプトカー「EXP 100 GT」でした。内外装にサステナブルな素材を使いながら、AIを組み込んだアシスタンス機能により、ドライバーも乗員にも最高のラグジュアリー グランドツーリング体験を提供する、まさに2035年のグランドツーリング体験のショーケースとなっています。

電動化や再生可能エネルギーの分野では、フライングスパー ハイブリッドのエンジニアリングプロトタイプを使用し、再生可能エネルギーのみを使用したテスト走行がアイスランドで行われました。第2世代のバイオ燃料と、地熱発電所で発電された電気で充電されたバッテリーの組み合わせで実施されたこのテスト走行では、733kmを走破してアイスランドを一気に横断しました。また、昨年6月に米国コロラド州で開催されたパイクスピーク・インターナショナル・ヒルクライムで、再生可能燃料を使用したコンチネンタルGT3が、タイムアタック1でクラス2位、総合で4位という好成績を収めました。同レースに参加したサステナビリティ重視のライバルよりも速いタイムを記録し、再生可能燃料の可能性を示しました。

一般のお客様向けには、マリナーがツイードのドアパネルのオプションを追加するなど、レザー以外のサステナブルな素材の数々を商品化しています。ツイードパネルの素材は、スコットランドで倫理的かつ環境への影響に配慮したプロセスで調達されています。そしてツイードの選択肢は70種類以上にのぼり、英国の伝統的な素材を使いつつ、モダンなブリティッシュラグジュアリーを実現します。



ダイバーシティ

ベントレーが女子学生向けメンタリングプログラムを開発

過去最多の研修生を受け入れ



来にわたって持続的にビジネスで成功し続けるため、ベントレーが重視しているのが優秀な人材の確保と育成です。

ダイバーシティの観点では、次世代の女性の人材育成を支援するため、テクノロジーやエンジニアリング、デザイン、ビジネスの分野において女子学生向けに専用開発したメンタリングプログラムを開始しました。昨年12月にUAEで先行して開始されて成功を収めた後、自動車業界でのキャリアを検討する女性を増やすためのベントレーの戦略の一環として、英国でも展開されることになりました。

また、昨年11月には、ベントレー史上最多となる113人の研修生を迎え入れました。研修生たちは早期キャリアプログラムを経た後、幅広い部門で活躍することになります。研修生のうち約3分の1には、将来の会社形成が期待されており、最先端のデジタル技術に特化したプログラムを用意。Beyond 100 戦略で推進するダイバーシティ&インクルージョンを重視する経営戦略により、性別はもちろんのこと、さまざまなバックグラウンドを持つ研修生が大幅に増加したことも特徴です。





新世代を象徴するスーパースポーツ マセラティ MC20

マセラティ ジャパンは、2020年9月に発表したマセラティの新型スーパースポーツカー、MC20の日本でのデリバリーを開始しました。同社の新世代を象徴するモデルとしてラインアップされます。

SUMMARY

- モータースポーツで大活躍したMC12の後継モデルとなるスーパースポーツカー
- MC20の「MC」はMaserati Corse マセラティ コルセの略、「20」は発表年および新時代の幕開けである2020年の意味
- 新開発エンジンの「Nettuno(ネットゥーノ)」を搭載。マセラティの自社開発エンジンは1998年以来22年ぶり
- 自社開発の燃焼システム「MTC」は、F1由来のプレチャンバー、ツインイグニッションおよびツインスパークが特徴
- 最高出力630ps、最大トルク730Nmを発揮。0-100km/h加速は2.9秒以下、最高速度は325km/h以上を実現



EXTERIOR

- デザインは約24ヶ月で製作。マセラティとしては初となるバタフライドアを採用
- 「バードケージ」の愛称で知られる往年のレースカー「Tipo 61」、1990年代のスーパースポーツ「MC12」のデザインモチーフを採用
- 空力特性は、ダラーラの風洞実験室における2,000時間以上に及ぶテスト、1,000回以上の数値流体力学シミュレーションを経て決定
- クーペモデル、オープンモデル、BEVのすべてに対応できるフレキシブルな車体デザイン
- 外装色は、MC20専用色として6つの新色を開発



TECHNOLOGY

- 3.0L V6 ツインターボエンジンは、重心高を抑えるため90度のバンク角を採用。潤滑方式はドライサンプ
- カーボンファイバー製のセンターモノコックを採用。モノコック重量は100kg以下
- 車重1,500kg以下 + 最高出力630psにより、クラス最高のパワーウェイトレシオ2.33kg/psを実現
- トランスミッションは8速DCT。LSDは機械式が標準。電子式LSDがオプション
- 段差の乗り越えに対応するサスペンションリフターをオプションで設定。ボタン操作で前輪を50mm上げることが可能



INTERIOR

- 最上質のレザーとアルカンターラ、カーボンファイバーにより、レーシングミニマリズムとマセラティのラグジュアリー感を融合
- コックピット用およびマセラティ・マルチメディア・システム(MIA)用として、2つの10.25インチスクリーンを装備
- カーボンファイバーデザインのセンターコンソールとステアリング内にコントロールボタンを集中配置
- ネットワークに常時接続され、コネクテッドナビゲーション、ALEXA(アレクサ)、Wifiホットスポットなどのサービスが利用可能
- 市販車としては世界で初めてソナス・ファベール社のハイプレミアムオーディオシステムをオプション設定



BRAND STORY

MASERATI MC MODELS



最新の「MC20」は2004年の「MC12」以来となるミッドシップスーパースポーツ

マセラティとモータースポーツ

1914年12月にイタリア・ボローニャで誕生したスポーツカーブランドのマセラティ。これまで何度も経営難に見舞われながら、100年以上にわたって独自のスポーツカーをリリースしています。レースとも縁が深く、1926年にはタルガ・フローリオでマセラティ Tipo 26がクラス優勝を獲得します。その後も1939年にはアメリカのインディ500で優勝。1950年代にはF1に参戦し、1954年と1957年にチャンピオンを獲得しました。



マセラティにF1世界チャンピオンの座をもたらした「250F」

伝説的な「バードケージ」の登場

資金難により一度はレースから撤退したマセラティですが、1960年代にはスポーツカー世界選手権で大きな成功を収めます。そのときのレースカーが「バードケージ」の愛称で知られる「Tipo 61」。「バードケージ」とは、軽量・高剛性を両立させるため、クロムモリブデン鋼を鳥かごのように複雑に組み上げたスペースフレームを採用したことで名付けられたもの。軽量の車体設計は、最新の「MC20」に通ずる伝統となっています。



1960年代のスポーツカー世界選手権で大きな成功を収めた「バードケージ」と「Tipo 61」

「MC12」でFIA GT選手権を制覇

「MC20」の「MC」とはマセラティ コルセの略で、そのルーツは2004年に発表された「MC12」に遡ります。「MC12」はFIA GT選手権参戦のために製作されたミッドシップのスーパースポーツ。フェラーリの特別限定モデル「エンツォ・フェラーリ」をベースに製作されたこともあり、レースカーとしての素性に優れていました。2005年から2010年にかけて参戦したFIA GT選手権では、14のタイトルと19勝を記録するなど、大きな活躍を見せました。



FIA GT選手権を制覇した「MC12」

「MC」の名はマセラティのスポーツモデルに

モータースポーツを想起させる「MC」の名は、マセラティのロードカーにも与えられています。2022年2月にはギブリとレヴァンテの限定モデルとして「MCエディション」を発表。日本には年内導入が予定されています。

HERITAGE

ベントレーがグッドウッドの公式パートナーに
ヘリテージコレクションに追加の6台を展示

ベントレー モーターズは、4月9日～10日に開催されたグッドウッドメンバーズ ミーティングに公式オートモーティブ パートナーとして参加しました。グッドウッド メンバーズ ミーティングは、1950年代から1960年代にかけてグッドウッドで開催されていたBARCメンバーズ ミーティングを原型とし、その雰囲気や自動車を通じて醸成される友情を再現することを目的としたモータースポーツの祭典です。

ベントレーは今回のイベントで、1929年～2019年の90年の歴史の中で製造された、ブランドを象徴する10台の車両を展示。工場はカーボンニュートラルとなり、本社敷地が拡大してきたことに合わせて、ベントレーのヘリテージコレクションもその数を増やしてきました。このほど新たに6台が追加され、合計35台となりました。グッドウッドで展示された10台には、今回新たに加わった6台のうちの4台が含まれています。追加された6台は下記のとおりです。



- Speed Six (1929年製)：この車両が加わり、戦前のコレクションが完成
- Mark VI (1949年製)：クルーで最初に製造されたモデル
- S3 スタンダード サルーン (1963年製)：当時の最上クラスの4ドア
- コンチネンタル (1984年製)：かつての会長が使用していたドロップヘッド クーペ
- ターボR (1991年製)：ベントレーをスポーツブランドとして生まれ変わせたモデル
- アルナージ レッドレーベル (2001年製)：6 3/4リッター V8 エンジンを再びセダンに搭載したモデル

これらの6台が追加されたことにより、ヘリテージ コレクションにはあらゆる年代のモデルが含まれ、すべての重要なモデルが勢揃いしたことを意味します。クリックルウッド、ダービー、クルーと、それぞれの拠点で製造されていたモデルが一堂に会する見事なコレクションは、ベントレーの100年以上にわたる歴史を途切れることなく表現しています。

ベントレーのヘリテージコレクション責任者のマイク・セイヤーは、「ベントレーは102年の歴史の中で、最大かつ最速の変革を遂げています。ブランドが新しい方向性を打ち出している今、重要なのは今日のベントレーがどこから来たかを示すことです。数を増やしているヘリテージコレクションは、そのプロセスにおいて重要な役割を果たしています」などとコメントしています。

ベントレー名古屋がショールームを 中区に移転しリニューアルオープン

ADWホールディングス インポート事業部・ベントレー名古屋株式会社が運営する正規販売店の「ベントレー名古屋」が4月1日、愛知県名古屋市中区新栄に移転してリニューアルオープンしました。

ベントレー名古屋は、2016年から名古屋市千種区のショールームで営業してきましたが、今回の移転＆リニューアルオープンにより、さらに多くのお客様のご要望にスムーズに対応するとともに、ラグジュアリー ブランドにふさわしい、より洗練された空間を演出できるようになりました。ショールームはベントレーの最新CIに準拠した2階建てで、1階の新車エリアには常時6台を展示できます。また、ベントレーのアクセサリなど小物類の展示も充実させ、明るく開放的なショールームへと生まれ変わりました。

若宮大通の千早交差点の北側に位置し、名古屋市内から車でアクセスしやすいロケーションです。4月16日～17日には、お客様向けのグランドオープニング イベントも実施し、愛知県を中心とする東海エリアのお客様が新ショールームに足を運んでくださいました。

ベントレー モーターズ アジアパシフィックも日本市場への期待が高く、リージョナルディレクターのニコ・クールマンは「ベントレー名古屋は2016年以降、中部地区のお客様にベントレーの最高レベルのラグジュアリー体験を提供し続けてきました。このリニューアルオープンした施設においても、素晴らしいラグジュアリー商品とサービスを通じ、最もパーソナルなオーナーシップ体験をお届けするよう努めています」などとコメントしています。



ベントレー名古屋

所在地： 〒460-0007 愛知県名古屋市中区
新栄1丁目35番6号
営業時間： 10:00～18:00
定休日： 毎週月曜日（祝祭日の場合は翌火曜日）
TEL： 052-265-9181

世界最古のTシリーズの レストアを開始



ベントレー モーターズはこのほど、世界最古のTシリーズの1台をレストアするプロジェクトを開始しました。Tシリーズは1965年に発売されたモデルで、レストアする車両は最初期に製造されたものであることがわかっています。この車両は未走行のまま長年保管されており、6 1/4リッターのプッシュロッド式V8エンジンとトランスミッションの状態は良好です。レストア作業は少なくとも18カ月ほどかかる予定ですが、優れたコンディションに生まれ変わることが期待されています。レストアの作業は、アプレンティス（見習い工）らがベントレーのレストアのスペシャリストの指導を受けながら行います。レストアは2023年に完了する予定で、ベントレーのヘリテージコレクションに加わることになります。

Tシリーズは1965年10月5日のパリ モーターショーで公開されました。最大の特徴は、初めてモノコックが採用されている点です。また、Tシリーズのスタイリングを担当したのは、1952年発売のR-Typeコンチネンタルを手掛けたジョン・ブラッチレイです。S2にも搭載された6 1/4リッターV8エンジンを採用し、当時の4ドアセダンとして、最高速度は時速115マイル、0-62mph加速10.9秒という性能を発揮しました。このエンジンは後に排気量を増やして6 3/4リッター V8エンジンとなりますが、2019年にミューラザンヌの製造が終了するまでに、当初の2倍以上の出力と3倍のトルクを発揮しながら、排出ガスは99%も削減するという進化を遂げました。

初代Tシリーズは1,868台が製造され、価格は5,425ポンドで、大半がスタンダードの4ドアサルーンでした。1966年には2ドアが、その1年後にはコンバーチブルも登場しましたが、製造台数はわずか41台にとどまりました。1977年には「T2」として知られる2代目モデルが発売され、T2は1980年まで製造されました。

ベントレー モーターズ2021年決算 売上高、営業利益ともに過去最高を記録



ベントレー モーターズがこのほど発表した2021年の業績によると、売上高、営業利益がともに過去最高を記録しました。すでに発表されていた2021年の全世界の販売台数は前年比31%増の14,659台でしたが、これによって利益も大幅増となりました。

売上高は28億4,500万ユーロで、パーソナライゼーションの拡大と、Speedやマリナー、ハイブリッドといった派生モデルの拡充が奏功し、1台あたりの平均売上高は前年比8%増を記録。これが売上高利益率を13.7%にまで押し上げる要因となりました。なお、営業利益は前年実績を3億6,900万ユーロも上回る3億8,900万ユーロとなり、大幅な増益を達成しました。

エイドリアン・ホールマーク会長兼CEOは、「経済の見通しが今なお不透明であるにも関わらず、素晴らしい業績を達成できました。これはベントレー モーターズに関わるあらゆる人たちの努力の賜物です。ベントレーは今後も、2030年までのカーボンニュートラルの実現に向け、全ラインアップを電動化する“Beyond 100”戦略を推進していきます」などとコメントしています。また、ヤン・ヘンリック・ラフレンツ取締役（ファイナンス&IT担当）は、「2021年の好業績の要はベントレーのブランド力であり、ベンティガ ハイブリッドなどのニューモデルが3億8,900万ユーロという過去最高の営業利益に大きく寄与しました。クルー工場のサステナビリティ実現に向けた30億ユーロの投資でハイブリッドモデルの需要拡大に備え、これからも持続可能なラグジュアリーモビリティにおけるベンチマークであり続けます」などと語っています。

ベントレー、Naim、マッツァーロが 三位一体で最高の車載サウンドを制作

ベントレー モーターズとオーディオパートナーのNaimは、ハリウッドの音楽業界の巨匠スティーヴ・マッツァーロと提携し、ベントレーの最高級車載サウンドシステムの卓越した性能を示すため、特別に開発された他に例のないサウンドトラックを制作しました。近年、映画『007/ノー・タイム・トゥ・ダイ』や『DUNE/デューン 砂の惑星』などの音楽を手掛けた作曲家兼音楽プロデューサーのマッツァーロは今回、Naimオーディオシステムのパワーや鮮明さ、豊かさを示すとともに、ベントレーの設計の哲学である“インスパイアし、調和が取れていて、そして強力であること”を音楽的に解釈した楽曲を制作するようベントレーから依頼されました。



そして、Naimオーディオシステムを搭載するフラウイングスパーは、マッツァーロの作品にとって最適なコンサートホールでした。キャビン内の計19個のスピーカーと2,200ワットのアンプ、フロントシートに組み込まれたキネティック シェーカーを備えたこのシステムは、あらゆるサウンドを特別なものに変えるパワーと周波数域を兼ね備えています。今回のように楽曲がこのシステムに合わせて作られている場合は、その結果は本当に素晴らしいものになります。

マッツァーロは今回のコラボレーションについて、「私にとってベントレーは、エレガントさと卓越性の象徴であるとともに、パワー、スピード、機械的な複雑さも表しています。そのため今回の作品では、ギターとともにパワフルでヘビーなローシンセ、非常にテクニカルなドラム、複雑なハンドパーカッションを組み合わせました。車の仕組みと同じように、目に見えないけれどそこにあって、バックグラウンドで動いていることがわかります。リスナーの潜在意識に映画のエッセンスを入れ、旅に連れ出したという意図がありました。この作品には、特定の方法でスタートし、人々をどこかに導くという流れがあります」などと語っています。

クルマのライフサイクルアセスメント

環境に対する配慮が求められる今、当然、自動車業界もサステナブルであることが重要になっています。そうした中で、覚えておきたいのが「ライフサイクルアセスメント（LCA）」という考えです。自動車業界ならではの問題も理解しておきましょう。



クルマの一生の環境負荷を評価する

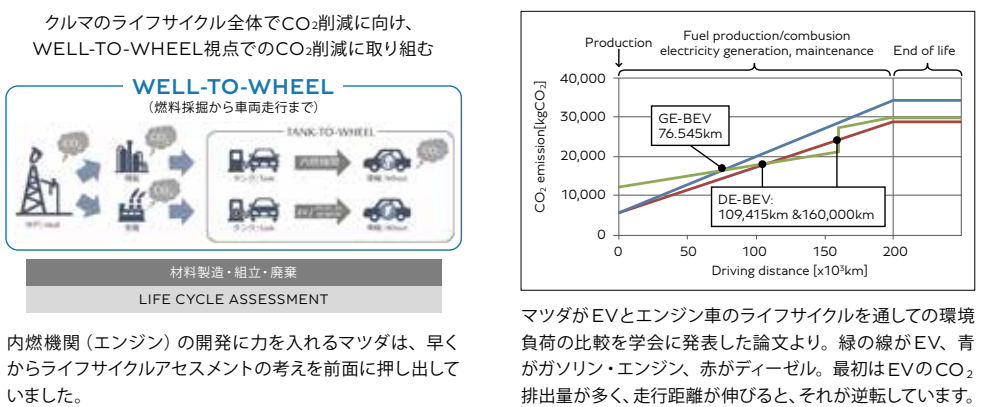
ライフサイクルアセスメント（Life Cycle Assessment：LCA）とは、製品・サービスのライフサイクル全体での環境負荷を評価することを意味します。クルマでいえば、原材料から車両製造、販売後の走行、廃棄までにかかる環境負荷＝CO₂排出量を意味します。当然のように、少しでもCO₂の排出量は少ないにこしたことはありません。そしてクルマは、長い年月に渡って使用される製品のため、走行時のCO₂排出量、つまり燃費性能が重要となります。

Life Cycle Assessment



タンク、それとも井戸から？

かつて、クルマの環境負荷（排出するCO₂）といえば、走行時に使う燃料消費を指すものでした。つまり、燃料タンクからホイールまで“TANK TO WHEEL”という考えです。しかし、もっと大きな目で見れば、その燃料を作るところから考えなければなりません。また、充電して走るEVであれば、電気を作るのにエネルギーが必要です。さらには、EVやハイブリッドカーが搭載する、駆動用の二次電池は製造時に非常に大きなエネルギーを必要とします。EVやハイブリッドカーは、走行時に出す排気ガスはゼロ、もしくは非常に少なくなりますが、その前段階で大きなエネルギーを使っているのです。ライフサイクルアセスメントで考えると、EVは製造時にたくさんのCO₂を排出するため、走行距離が短いとエンジン車よりも環境負荷が大きくなります。つまり、目先ではなく、大きくトータルで環境負荷を考えるのがライフサイクルアセスメントとなるのです。



二次電池の製造にかかるエネルギー

EVやハイブリッドに使う二次電池（リチウムイオン電池）の製造には、非常に大きなエネルギーが必要です。その理由は、製造時に異物が内部に混入すると、製品が最悪発火するからです。異物には水分も含まれるため、製造ラインは無人で、しかも製造空間は乾燥させる必要があります。つまり、クリーンルームのように普通の空間から隔絶させ、内部をカラカラに乾燥させなければならないのです。その空調に膨大な電力を使います。また、完成後は、満充電させて、それを放電させて、安全性を確認します。その充放電にも電力が必要です。



日産が4月に公開した「全個体電池の試作生産設備」。人の汗や息も嫌うため、隔離された空間で試作生産作業を行っています。

事業活動全体の環境負荷を評価する

環境負荷を評価するのはクルマだけではありません。今は企業のビジネス活動全般が発生させる環境負荷（温室効果ガス排出量）も算定するようになっていきます。それが「サプライチェーン排出量」です。自社の活動だけでなく、原材料、自社で使うエネルギー、発売後の製品までが算出の対象となります。ただし、区分があり、自社だけの排出量をスコープ1、自社で使うエネルギーをスコープ2、原材料や発売後まですべてを含むものがスコープ3となります。



クルマだけでなく、企業の活動が生み出す環境負荷（温室効果ガス）を算定するのが「サプライチェーン排出量」。大手企業などは自社の排出量を算定するようになっていきます。